

課題 「湖」

「クローバー」

人物

木崎卓也 (28)

鑑識係

深山翼 (24)

鑑識係

## ○湖岸

自然豊かな湖の風景。

湖岸には草原と木々が茂っている。

その草むらを探索している、深山翼

(24) と木崎卓也 (28)。

二人は、警察の鑑識系の服装をして  
探索をしている。

深山「：ぶっちゃけ、聞いていいですか？」

木崎「なんだー？」

深山「ここ調べるの、何回目でしたっけ？」

木崎「3回？いや4回目だったかな？」

深山「それで何か見つかったことは」

木崎「：ねえよ」

深山「そうですよね：」

木崎「なんだよ」

深山「いや、ちよつと：」

深山、顔をあげ湖を見る。

木々の間から湖がみえる。

湖上のボートではウェットスーツを着  
た鑑識たちが湖の中を調べている。

深山「：あっちでしょ。死体、隠すなら」

木崎「そうだろうな」

深山「じゃあ、何してるんですかね、僕ら」

木崎「お前」

深山「（木崎を遮って）わかってますって。

もしかしたら、そう思わせておいて、こっ  
ちに埋めたかもですしね」

深山は、また草むらの中を探し始める。

木崎「：」

深山「あと、ほら良くドラマとかで、犯人は  
死体現場に戻るっての」

木崎「ああ？」

深山「もしかしたら、この辺りで湖を見に来  
て、それで何か落とすかもですもんね」

木崎「ああ：」

深山「そういうの考えて、仕事しているんで  
す、僕」

木崎「：ふーん」

深山「え？先輩もそういうの考えませんか？」

深山、木崎をみる。

木崎は、表情のない顔で湖上を眺めている。

木崎「（見られていることに気がついて）なんだよ？」

深山「いや、僕、つい先輩にはくだらない事、話しちやいますけど：」

木崎「あーそうだな」

深山「先輩って、ほんとは真面目でいろいろ考えてるんだらうなって」

木崎、笑う。

深山「なんか、あの：」

木崎「そうみえるか？」

深山「あ。はい」

木崎「：お前、出世するといいな」

深山「え？」

木崎「俺のこと、そんな風に言う奴は他にいねえよ」

深山「何言って。（照れて）ちよ、僕あつちのほう、調べますんで」

奥のしげみに入っていく深山。

それを見送る、木崎。

木崎、木々の間から湖をみる。

湖上では、ウェットスーツを着た、

鑑識たちがみえる。

木崎「そこにはいねーんだよなあ…」

深山の声「あ！」

木崎、表情が変わる。

木崎「：なんか、見つかったか？」

深山がしげみからでてくる。

深山「これ！みつめました」

深山の手には、四葉のクローバーが

握られている。

深山「珍しくないですか？こんな所で」

木崎「：脅かすなよ」

深山「いやー小学生の時以来ですよ。みつけ

たの。僕、なんか良い事ありますかね？」

木崎「そうだな」

木崎、うすら笑っている。

深山「：なに、笑ってんすか？」

木崎「いや、お前が出世する姿をさ、ちよっ

と想像してさ」

深山「（少し考えて気が付き）え?! それって、出世しないって言ってますよね?」

木崎「そんなことねえよ」

深山「いや言ってるじゃないですか!」

木崎「俺じゃなかったら、怒られてるだろ。」

遊んでいるのと同じだよ。それ」

深山「:まあ、そうですね。僕、この仕事むいてないのかな」

木崎「お前さ、なんで警察官なんかになったんだ?」

深山「:だって、かっこいいじゃないですか、ドラマとかにも出てくるし」

木崎「そんなんでなったのか」

深山「公務員で、くいっぱぐれないかなとかも思いましたけどね」

木崎「ま、そんなもんか」

深山「先輩は、なんでなったんですか?」

木崎、それには答えない。

湖岸に水音が響く。

木崎「：お前さ、まだ水の中での捜索ってしたことはないだろ？」

深山「え？先輩やったことあるんですか」

湖岸で、透明な水が波打っている。

木崎「川でおぼれるとかあるじゃん？あれ川底にさ、沈んでるんだよ。人間が」

深山「：研修ではきました」

木崎「意外と、きれいなんだよな：」

深山「え？」

木崎「ほら、まだ死んだばかりだから」

深山「：」

木崎「だからさ、あそこの死体は、とんでもない事になっているだろうな：」

木崎、湖上を見ながら、言う。

深山「先輩、それって、殺されてもう結構たつてるって思ってる：」

木崎「普通そうだよ。もう1週間も見つかってないんだから」

深山「：」

木崎「ちがうか？」

深山「僕、今まで殺されたって言ってました  
けど・・・」

木崎「けど？」

深山「もしかしたら生きてるかもって・・・」

木崎「・・・」

深山「だって、そう思わないと辛いじゃない  
ですか！あんな小さい子なのに」

木崎「：お前は、優しいな」

深山「いや、そういうんじゃない」

木崎「お前の見つけたクローバー、本当に幸  
せがくればいいのにな」

深山「先輩、何、急に」

木崎「何って、綺麗な心のもってんなって、  
褒めてんだよ」

深山「・・・」

木崎「なんだよ？」

深山「：僕、あっち見てきます」

深山、しげみに入っていく。

深山、湖岸に立ち、湖上での搜索風景  
を眺める。

湖の中を見ると、きらつと光るものを見つける。

深山、それをよく見ようと湖面に身を乗り出す。

深山、ぐいっと押されて湖に落ちる。なぜか引き込まれるように、水底に引き込まれる。そして一瞬、溺れそうになりながら、なんとか浮かび上がる。深山の目の前には緑の木々、そしてちらつと帽子を被った子供の姿がみえる。

水音を聞いて、木崎がやってくる。

木崎 「大丈夫か？」

深山 「え？ああ、そんな深くないし」

水深は、深山が立てるくらいの深さであつた。

木崎 「なんだ、おぼれたのかと」

深山 「いや、こんな浅いし：」

木崎 「よかったな」

深山 「先輩、さつき子供いませんでした？」

木崎「子供？」

深山「誰かに押されて、落ちたような気がして：あれ？」

木崎「：こんなところに子供なんているわけないだろ」

深山「まあ、そうですよね」

その時、深山は湖岸の木の幹にひっかかっている子供の帽子を見つける。

それは、さっきみた子供がかぶっていた帽子と同じものである。

深山「：先輩。これ！」

木崎その帽子をみて、驚く。

深山「これって：」

木崎「風でここまで流されたのかもな」

深山「じゃあ、さっきのは：」

木崎「え？」

深山「見つけてほしくてって？：そんな！」

深山、愕然とした顔で、湖上で捜索しているボートをみる。

× × ×

湖上には夕日が光っている。

薄暗くなつていく湖岸で、木崎がひとり、クローバーを持って立っている。

木崎「埋めたはずだ……」

木崎、草むらのある一点をじっとみている。

木崎「（うすら笑いながら）掘るか？」

木崎の目の前には、子供がじっと木崎をみている。

木崎には、それは見えない。

了